



説教要旨「欲深い農夫たち」

哀歌 1章12～14節

ルカによる福音書20章9～19節

ある人がぶどう園を作り、それを農夫たちに貸して長い旅に出ました。そして収穫の時期になったので、主人はぶどう園に僕を何度も遣わしますが、農夫たちは僕らを袋だたきにして追い返すのです。そこで主人は、「どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう」（ルカ 20:13）と言って愛する息子を遣わします。すると農夫たちは、この息子をぶどう園の外にほうり出し、殺してしまったのです。そうなれば、いかに我慢強い主人であっても怒って農夫たちを殺してしまうでしょう。

イスラエル歴史においてその指導者たちは、悔い改めを呼びかけてきた預言者たちを迫害し、その言葉をないがしろにしてきました。それでも神様はイスラエルに預言者を送り続け、忍耐強く神に立ち返ることを求め続けたのです。そしてとうとう神様は、愛する息子をイスラエルに、ぶどう園の農夫たちの所へと送り出される決断をされました。しかし神様の独り子であるイエス様は、このたとえの“愛する息子”のように殺されてしまいます。「そんなことはあってはならない」（ルカ 20:16）ことなのに、そんなことが起こってしまうのです。愛する息子が殺されてしまえば、いかに我慢強い主人であっても、怒って農夫たちを殺しに戻ってきます。もはや滅びは逃れようがありません。…本来であれば。

しかし、人々から必要ないとうち捨てられ、十字架にかけられたイエス様は“隅の親石”として、滅ぶはずであったこの世界を救い、今も支え続けておられます。本当であれば、神様の怒りの前に滅びるしかないわたしたちが赦されて、ぶどう園で働く者とされているのは、イエス様が目では見ることはできない所で、支えて下さっていてくださっているからです。神様の隣におられるイエス様が、わたしたちのことを神様に取りなして下さっている。そのことによってわたしたちは滅びを免れています。

イエス・キリストこそがこの世界のキーストーンです。この要石なしでは立ちゆかないのです。

(2023・3・26 説教者：稲垣真実)